

大学中期計画(2024-2029)

-内部質保証の方針-

学校法人大阪成蹊学園

大阪成蹊大学

I. 大阪成蹊大学中期計画策定の経緯

学校法人大阪成蹊学園では、2020(令和2)年度から2029(令和11)年度にかけての長期にわたる経営計画を明らかにするものとして、「大阪成蹊学園 長期経営計画(2020-2029)」を策定し、公表している。ここでは、10のアクションプランを柱として、建学の精神「桃李不言下自成蹊」を体現する「人間力」のある人材の育成を目的とする全学的な教育改革と、安定的な法人・学校運営を可能にする経営基盤・ガバナンスの改革に取り組み、教育研究活動と法人経営の両面で多様なステークホルダーから信頼され、選ばれる学園をめざすことが述べられている。さらに、法人及び学園各校、各部門における各年度の事業計画の策定、日常の業務遂行におけるエビデンススペースの PDCA サイクルの徹底、自己点検・評価活動等を通じて、本長期経営計画の実現を図るとされている。

そこで、大阪成蹊大学では、これら10のアクションプランのうち、とりわけ、

6. 教育の質を保証し、特色ある教育を展開する全学的な教学改革の推進

を中心として、各学部及び大学が一体となって取り組まねばならない11の課題を切り出し、2024(令和6)年度から2029(令和11)年度にかけての6箇年を前半と後半に分けて中期計画を策定し、内部質保証の方針とする。

II. 大阪成蹊大学 中期計画(2024-2029)

1 アクティブ・ラーニング型授業	
2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
<p>大阪成蹊大学のディプロマ・ポリシーに掲げる人材を育成する教育の特色として「アクティブ・ラーニング型授業」を推進してきた。これには「アクティブ・ラーニング・ハンドブック(2018年)」「同改訂版」,「同 ICT 増補版」の発行、学内専用サイト(2022年)の構築などの成果がある。2024年度からは、教員の授業力を向上させ、学生が主体的に学びを深める環境を整備する。</p> <p>(1)継続的なFDの実施 教員がアクティブ・ラーニング型授業を効果的に実施できるようにFD研修会を展開する。</p> <p>(2)アクティブ・ラーニングに関する情報提供 国内外の情報を収集し、多様な学生への対応に活用する。</p> <p>(3)多様な学生への対応 教員と学生が協働するアクティブ・ラーニング型授業を創造し、授業の質を向上させる。</p>	<p>(1)継続的なFDの実施 多様な学生に対応したアクティブ・ラーニング型授業のFD研修を年次的に実施する。</p> <p>(2)アクティブ・ラーニングに関する情報提供 新しい時代にマッチしたアクティブ・ラーニング型授業の知見を集積して共有する。</p> <p>(3)多様な学生への対応 学生が望むアクティブ・ラーニングを語り合う場を設定し、教員と学生が協働する授業を創造する。</p>
2 初年次教育	
2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画

<p>大阪成蹊大学の LCD(リテラシー/コンピテンシー/ディグニティー)教育の基礎として初年次教育を重視している。新入生が大学生活をスムーズに開始できるよう、学修スキルの定着と「自己を知り、社会を知る」を目的としたカリキュラムを展開してきた。「ソーシャル・タッチポイント」(社会との接点)を積極的に取り入れ、大学での学修が社会人基礎力を養うことに気付かせる機会を設定している。初年次教育における主要 4 科目の具体的な目標は次の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタディスキルズ 1: 社会を知る ・スタディスキルズ 2: SDGs を自分自身と結びつけて理解する ・成蹊基礎演習 1: アクティブ・ラーニングの基礎を身につける ・成蹊基礎演習 2: アクティブ・ラーニングの応用を体験する <p>現状の初年次教育をさらに充実させるために以下の 2 点に取り組む。</p> <p><u>(1) ソーシャル・タッチポイントのさらなる充実</u></p> <p>これまでの実績を踏まえ、講師の選定や招聘のタイミングなど、学修効果を高めるための検討を行なう。</p> <p><u>(2) SDGs ビジョンレポートコンテストのさらなる充実</u></p> <p>学生レポートの中から優秀な作品を選ぶ「SDGs ビジョンレポートコンテスト」を 2022 年度から実施している。2023 年度からは、経年での提出作品の質的变化を可視化できるようにレポートを 4 段階の全体的ルーブリックを用いて評価している。評価結果を踏まえて、教育方法の改善について検討する。</p>	<p>初年次教育の学修成果の可視化に関しては、SDGs ビジョンレポートコンテストと成蹊基礎演習での学修成果の可視化の方策を検討する。</p> <p>また、初年次教育は「キャリア教育」「学部専門教育と卒業研究・卒業制作演習」「アクティブ・ラーニング授業」「学修成果・到達度の可視化」など関連する事項であるため、連携、協働する体制の構築を検討する。</p>
--	---

3	キャリア教育(インターンシップを含む)	
	2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
	<p>社会が大きく変化する中で、社会人として求められる能力には、主体性、思考力、協働力が含まれる。</p> <p>大阪成蹊大学では、これらを養うため、課題解決型学修(PBL)を含む段階的なキャリア教育を実施してきた。</p> <p>今後も、社会との接点を強化し、実践的な学びを進めることで、有為な人材を育成していく。</p> <p><u>(1) 体験・実践による学びの充実</u></p> <p>企業や地域社会の実態と課題を理解し、解決策を考えるPBL授業を通じて、社会体験の機会を充実させる。</p> <p><u>(2) 業界・職種研究の充実</u></p> <p>多様な企業。業界の理解を深め、目指す職種と必要な能力の獲得を目指す。</p>	<p>社会変化と、人材ニーズの進化に応じて、キャリア教育の取り組みをさらに発展させていく。雇用・採用形態の多様化(「職種別」採用、「ジョブ型」採用など)やデジタル化の進展に対応し、高度な専門的な能力の育成に注力する。</p> <p><u>(1) 社会の変化への対応</u></p> <p>デジタル化がさらに進行する社会において求められる問題発見力や予測力といった能力の獲得を目指す。</p> <p><u>(2) 継続的な能力開発</u></p> <p>大学教育での専門能力育成に加え、卒業後の能力開発への取り組みを促進する。そのため、学生が社</p>

	会で活躍できるよう、ソーシャル・タッチポイントを充実し学生の就業観を培い、実践的な学びの場の提供に努める。
--	---

4	学部専門教育と卒業研究・卒業制作	
	2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
	<p>専門教育課程のコアとして「専門演習」科目を設定し、4年間をかけて、学部の専門領域における研究テーマの設定や調査・研究、企画の立案等に取り組み、学修した知識や技能を統合・発揮する「卒業研究／卒業制作」を卒業時の学修成果とする。この過程で、学生が学修した知識や技能を統合し、質の高い卒業研究・制作を成し遂げられるよう指導の充実を図る。</p> <p>(1) 学修成果の可視化</p> <p>ディプロマ・ポリシーに基づくルーブリックを活用し、学生と評価指標を共有し、卒業研究・制作の質の可視化をさらに推進する。</p> <p>(2) 卒業研究・卒業制作の質的向上</p> <p>FD 研修を通じて、専門演習に関する学修情報を共有し、卒業研究・制作の質の向上を目指す。また、卒業研究や卒業制作にあたり倫理的課題への対応を徹底するため、研究倫理に関する研修を実施する。</p> <p>電子化の促進</p> <p>卒業研究・制作ガイドラインや優秀論文集・作品集、卒業研究・作品発表会関連資料などの電子化を促進し、環境に配慮するとともに作業の効率化を図る。</p>	<p>(1) 学修成果の可視化</p> <p>引き続き、専門演習科目を通じた卒業研究・制作の質の可視化を推進する。</p> <p>(2) 卒業研究・卒業制作の質的向上</p> <p>FD 研修などを通じて、倫理的課題への対応強化とディプロマ・ポリシーやルーブリックの見直しを行い、教育内容の改善を図る。</p> <p>(3) 優秀論文・優秀作品の選考基準等の検討</p> <p>卒業研究や卒業制作を評価するに当たり、優秀論文・優秀作品の選考基準や選考プロセスの改善を目指す。</p>

5	学修成果・到達度の可視化	
	2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
	<p>学修者本位の教育実現のため、「何を学び、身に付けることができたのか」を学修者自身が説明できるように学修成果・到達度の可視化に取り組む。具体的には、各学生が卒業時に DP(ディプロマ・ポリシー)の各項目の能力を身につけられるよう各能力を可視化する。</p>	<p>内部質保障の観点からも可視化を通じた不断の改善に取り組む。そのために、具体的には以下の2点を目標とする。</p> <p>(1) 教学改革会議における連携強化</p>

<p>その可視化のアイテムとして具体的に以下の5つを設定する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 各学部で設定されたコア科目での可視化 2. GPA 3. PROG テスト 4. 各種コンテスト(SDGs ビジョンレポートコンテスト、未来展望レポートコンテスト、読書コンクール等) 5. 各種アンケート(授業評価アンケート、卒業時アンケート等) <p><u>(1) 学生への効果的なフィードバック方法の検討</u></p> <p>可視化の目的は、学生自身が、自身の能力を把握し、問題点を自覚した上で主体的に改善を目指し、卒業時に DP の各能力を身につけることである。そのために、学生に可視化した結果をフィードバックする効果的な方法を検討する。</p> <p><u>(2) 可視化結果の分析</u></p> <p>可視化結果の分析を通じた学位プログラムの有効性を検討する。</p>	<p>各学部が実施している学修成果可視化結果の分析や改善策の検討などを担う体制を整えるため、既存の教学改革会議における各プロジェクトとの連携を強化する。</p> <p><u>(2) 可視化を軸とした教育改善</u></p> <p>各学部が実施している学修成果可視化結果を分析し、学修目標が具体的であるか、成績評価が適切であるかなどの個々の授業科目レベルの改善から、カリキュラムの編成に関するような学位プログラムレベルの改善まで、幅広く改善の対象として検討する。</p>
--	---

6	産業界・地域・自治体等との連携による教育の質の向上	
2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画	
<p>大阪成蹊大学 6 学部および研究科のカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを踏まえ、本学の教育・研究に資する産官学・地域連携教育プログラムの構築を図る。</p> <p><u>(1) 企業や自治体、地域との連携による課題解決型教育プログラムの一層の充実</u></p> <p>企業や自治体、地域と連携し、各学部の専門性を活かした課題解決型の教育プログラムの開講により、実践的な知識・経験習得機会の創出を図る。</p> <p><u>(2) 連携先企業、自治体、教育委員会等との連携強化および新規連携先の開拓</u></p> <p>連携協定を締結している企業、自治体、および教育委員会等との人的交流や情報交換の活性化により連携を強化する。</p> <p><u>(3) 教育内容の可視化</u></p> <p>毎年度の取組みを「学外連携事例集」に整理し広報活用するとともに、産官学連携の好事例は「モデル連携活</p>	<p>多様な社会課題に取り組むことができる人材の育成と、大阪成蹊大学の地域貢献機能の強化を継続し、産官学・地域連携の深化と課題解決型教育プログラムの充実を進める。</p> <p><u>(1) 共同研究の充実</u></p> <p>共同研究を中心とした研究活動の充実により、新たな教育プログラムの開発や、イノベーションの創出へとつなげる。</p> <p><u>(2) 地域連携プラットフォーム機能の強化</u></p> <p>企業、自治体、高等学校、小学校、園など、大学を中心とする地域のステークホルダーとの連携を強化し、人と知の集結する拠点としての大学のネットワークを強化する。</p> <p><u>(3) 時代のニーズに応える教育プログラムの開発</u></p> <p>教員養成や AI・データサイエンス教育など、地域の人材育成やリスキリングに資する教育プログラムの開</p>	

<p>動」として具体的な授業内容を可視化する。</p> <p>(4)教育力のボトムアップ 産官学・地域連携の推進に関する FD 研修を実施し、6 学部及び大学院間において、好事例の共有、情報交換の活性化、その他必要なテーマを設けて研修を行う。</p>	<p>発や公開講座の開講を通して、社会に貢献する。</p> <p>(4)学部横断型の課題解決型・学外連携プログラムの構築 高度な社会課題の解決には分野の枠を越えた知識や技術的なアプローチが求められることから、各学部の学外連携プログラムを活かしながら学部横断型の課題解決型・学外連携プログラムの構築も実施する。</p>
--	---

7	AI・データサイエンス教育の充実と学内DXの推進	
2024-2026 年度計画		2027-2029 年度計画
<p>社会においてAIの進歩とデータの増加が加速化している時代に対応し、高等教育の内容及び体制の充実を図る。全学的な AI・データサイエンス教育の充実と学内DXの推進を目指す。</p> <p>(1)AI・データサイエンス教育の充実</p> <p>①AI・データサイエンスに関する教育 全学的に AI データサイエンスに関わるリテラシレベルの教育内容を充実し、全学生に履修させる。また、各学部の特性に応じた教育内容の充実を行う。</p> <p>②AI・データサイエンス技術を用いた教育 ラーニングアナリティクスなど細粒度の学修記録を利用したエビデンスに基づく教育方法の検討を開始する。また、生成AIを利活用した教育方法の試行を開始する。</p> <p>(2)学内DX推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内情報機器の統一的調達, 管理体制の確立 ・SINET の全学的導入検討 ・学修管理システムの導入検討 ・教務、研究、業務関連の情報資源の統一的管理と運用の検討 		<p>AI・データサイエンスに関する教育、及び AI・データサイエンス技術を用いた教育の本格化を予想し、高等教育の高度化と改善、学内業務の DX を推進する。</p> <p>(1)AI・データサイエンス教育の充実</p> <p>①AI・データサイエンスに関する教育 全学的に AI データサイエンスに関わるリテラシレベルの教育内容を高度化し、全学生に履修させる。また、各学部の特性に応じた教育内容を充実させる。</p> <p>②AI・データサイエンス技術を用いた教育 ラーニングアナリティクスなど細粒度の学修記録を利用したエビデンスに基づく教育を実践する。また、生成AIを利活用した教育方法を本格的に実践する。</p> <p>(2)学内DX推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学修管理システムの導入 ・教務、研究、業務関連の情報資源の統一的管理と運用 ・デジタル庁などの国家的施策に沿った業務フローの改善

8	ラーニングコモンズ及び図書館の利用促進	
2024-2026 年度計画		2027-2029 年度計画
<p>教育・研究基盤としての図書館の役割と目標が次のように定められている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育学修支援 2. 研究支援 3. 情報発信 <p>上記の役割と目標を合わせて中期計画を策定する。</p>		<p>従来の図書館の役割と目標に新たに社会貢献を追加し、地域との連携の推進を図る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教育学修支援 2. 研究支援 3. 情報発信 4. 社会貢献

<p>(1) 教育学修支援に関する計画</p> <p>①情報リテラシー教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初年次科目、専門演習科目等で実施する検索演習の内容やニーズや状況に合わせて更新する。 <p>②教育・学修に必要な情報資源の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部・学科、教員と連携し、電子コンテンツを含め、大阪成蹊大学の学修に沿ったコレクション構築を図る。 <p>③多様な学修を支援する教育学修環境の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ学修室、宿題カフェ、オンライン講座の利用率向上を図りつつ、学修環境を整える。 ・ピアサポート制度(学生チューター)による「学びのコミュニティ」の構築を進める。 <p>(2) 研究支援に関する計画</p> <p>①研究を促進する情報資源の持続的利用を可能とする環境整備の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国立国会図書館事業(レファレンス協同 DB・デジタル化資料送信サービス)への参加によりレファレンス機能の環境整備を図る。 <p>②教育活動への関与及び研究環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部・学科に応じたより適した文献検索指導を行う。 <p>(3) 情報発信に関する計画</p> <p>①学術情報リポジトリ・コンテンツの充実をとオープンアクセスの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンアクセス方針を策定し、その方針に基づくコンテンツ公開支援を行う。 <p>②効率的な研究紀要発行の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアレビュー制度の見直しを進める。 	<p>(1) 教育学修支援に関する計画</p> <p>①情報リテラシー教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レファレンス利用促進のため、パスファインダー・学生向け論文の書き方リーフレットを更新する。 <p>②教育・学修に必要な情報資源の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・価格高騰が著しい電子ジャーナル等のコンテンツについて契約手法や提供タイトルの見直しを含め、教員と連携し、継続して環境整備を図る。 <p>③多様な学修を支援する教育学修環境の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各種コンペティションの見直ししながら、学生参加を促進する。 ・学部推薦図書の実・拡充を図り、学修を支援する。 <p>(2) 研究支援に関する計画</p> <p>①研究を促進する情報資源の持続的利用を可能とする環境整備の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関連文献新着メール案内システム等のカレントアウェアネスサービスの充実を図る。 <p>②教育活動への関与及び研究環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2024-2026 年度計画を踏まえ、学科に応じたより適した文献検索指導を行う。 <p>(3) 情報発信に関する計画</p> <p>①学術情報リポジトリ・コンテンツの充実とオープンアクセスの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・策定されたオープンアクセス方針に基づくコンテンツ公開支援を行い、登録増加を図る。 <p>(4) 社会貢献に関する計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携を推進すべく、図書館および図書館が所有するコンテンツを活用した社会貢献の可能性を検討する。
---	--

9	英語・グローバル教育の充実
2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
<p>日本のグローバル競争力向上と人口減少問題に対応し、高等教育の質と多様性を高めることを目標に、中期計画を策定する。</p> <p>(1) 英語・グローバル教育の充実</p> <p>世界の多様な人々との関わりのなかでグローバル・マインドを育む国際交流プログラムを充実させる。</p> <p>①正課内外の学修が連関する英語・グローバル教育プログラムの確立</p>	<p>(1) 英語・グローバル教育の充実</p> <p>世界の多様な人々との関わりのなかでグローバル・マインドを育む国際交流プログラムの充実として以下に取り組む。</p> <p>①正課内外の学修が連関する英語・グローバル教育プログラムの確立</p> <p>②留学制度の更なる充実と留学者の派遣・受入の強化</p> <p>③グローバル・アクティブラーニング(プログラム)の充</p>

<p>②留学制度の更なる充実と留学者の派遣・受入の強化 ③グローバル・アクティブラーニング(プログラム)の充実 ④協定校の拡大と国際交流プログラムの充実</p> <p>(2)英語教育・グローバル教育改革に向けて</p> <p>①目標設定による自己学修調整力の育成 (例)英語資格試験、海外留学など ②英語教育センターの英語プログラムの見直しと整備</p>	<p>実</p> <p>④協定校の拡大と国際交流プログラムの充実</p> <p>(2)英語教育・グローバル教育改革に向けて</p> <p>①英語教育センターと国際交流センターの組織改編</p>
--	---

10	研究活動支援の充実	
	2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
	<p>教員の研究活動を支援するとともに次代を担う研究環境を整備することにより、多様な研究を推進する。</p>	
	<p>(1)特色のある研究の推進</p> <p>①地域課題に基づく研究活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産官学・社会連携センターにおいて、企業、組織、自治体等における解決すべき課題と大阪成蹊大学の研究の連携を図る。 ・データサイエンス研究教育連携センターにおいて、AI・データサイエンス教育に関する研究成果を社会に還元することを目的に、データサイエンス分野に係る企業・自治体等との連携を図る。 ・スポーツイノベーション研究所において、本学教員と学外のスポーツ関連組織、客員研究員の連携し、我が国のスポーツイノベーションの深化を目的に、スポーツ振興に関する学術研究とスポーツ領域における課題解決を図る。 <p>(2)研究支援体制の推進</p> <p>①公正な研究活動の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人を対象とする研究における研究倫理審査制度の強化 ・倫理教育、および研究活動および研究費使用等にわたっての法令や関係規則の遵守の徹底 <p>②研究成果の可視化推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の研究成果を社会に発信する体制の検討。 ・シンポジウム・フォーラム・研究会における成果を公開する機会の設定 <p>(3)外部資金による研究活動の活性化</p> <p>①外部資金の支援体制の整備</p> <p>②特許等の知的財産の取り扱い体制の整備</p>	<p>(1)特色のある研究の推進</p> <p>①地域課題に基づく研究活動の推進</p> <p>継続して実施する。</p> <p>(2)研究支援体制の推進</p> <p>①公正な研究活動の推進</p> <p>②研究成果の可視化推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館と協同し、研究紀要の査読制度の見直し、および学術情報リポジリーの活用の検証と再整備 ・シンポジウム・フォーラム・研究会における成果を公開する継続的な機会の設定 <p>③研究環境および支援体制の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究活動の活性化や研究開発マネジメントの強化を支える業務に従事する人材としてリサーチ・アドミニストレーター(URA)導入の検討 <p>(3)外部資金による研究活動の活性化</p> <p>①外部資金の支援体制の見直しと再整備</p> <p>②特許等の知的財産の取り扱い体制の検証と再整備</p>

11	FDプログラムの充実	
	2024-2026 年度計画	2027-2029 年度計画
<p>前年度までと同様、教員研修を含む全学的なFD活動を行い、FD活動の在り方を主体的に見直し、組織的改善ならびに研修理解度の可視化を図っていく。</p> <p>「大学全体レベル」「学位プログラムレベル」「授業科目レベル」において、学修・教育成果の把握及び可視化により得られた情報を共有し、対応するための方策を検討する。</p> <p>教育の質の保証と教育力の一層の向上を目指し、継続的に改善を図っていく。</p> <p>①組織的・体系的な全学研修を通して教育研究の資質・能力を向上</p> <p>②学部、学科教員へ教学改革の決定事項及び進捗状況を周知</p> <p>③適正な業務遂行のために必要な研修を通して教員個々の意識の向上</p> <p>④FD研修理解度の見える化＝FD研修報告書の提出(各学部)</p> <p>⑤次年度FD計画案作成、を各年度のPDCAサイクルとして展開し、常に改善や見直しを図る。</p> <p>(1)研修成果の見える化</p> <p>学部、学科教員へ教学改革FSD会議での決定事項及び進捗状況を周知しFD研修理解度の見える化(報告書の提出及びアンケートにて理解度調査の実施＝報告書提出100%/研修内容の理解度100%/教育活動への参考度100%を目指す)を実施⇒毎年度、教学改革会議で報告</p> <p>(2)研修の質を高めるための取り組み</p> <p>①組織的・体系的な全学研修を通して教育研究の資質・能力を向上</p> <p>②学部、学科教員へ教学改革の意義および決定事項及び進捗状況を周知</p> <p>③適正な業務遂行のための研修を通してコンプライアンス意識を高める</p> <p>(3)研修の内容</p> <p>①全学的に開催するFD研修会:4回程度実施</p> <p>②大学共通テーマ:15回程度実施</p> <p>③学部別(6学部・大学院)で検討したテーマに沿って開催するFD研修会実施</p>		<p>「さらなるデジタル技術の進化」「人工知能の発展」「環境問題への取り組みの強化」などが予想される時代を迎え、また国際的な関係や地政学的な変化も教育全体に影響を与える可能性がある。このような時代に対応し、学生への教育活動のさらなる充実を図る。</p> <p>(研修例)</p> <p>①デジタル技術と人工知能(AI)の理解と倫理観</p> <p>②レポート課題等で問題となる生成系AIの正しい利活用</p> <p>③初年次教育の在り方～学生の自己形成を促す方法～</p> <p>④授業評価アンケートの分析結果からみる授業改善</p> <p>⑤産官学プロジェクト型演習科目の授業の高度化と到達目標</p> <p>⑥学生の厚生補導(修学支援が必要な学生への対応)など</p> <p>上記について大学共通の課題もしくは学部の特性に合わせた課題としてFD研修を実施していくことを計画する。また、従来から継続して実施している取り組みを一層発展させ、これまで以上に積極的に、学生に向けたデータリテラシー教育の実践研修や、各プロジェクトによるFD研修に関する教材資料の作成レベルの向上、オンデマンド研修の有効活用、学部及び学科の特性に合わせたICTを活用した授業開発研修、学部及び学科教員に対する教学改革の意義および決定事項・進捗状況の周知、適正な業務遂行のための研修を通してコンプライアンス意識を高めることなどに努めていく。</p> <p>なお、「研修成果の見える化」「研修の質を高めるための取り組み」については2024-2026年度の計画で示している内容を継続して実行していく。</p>

【参考】

○学校法人大阪成蹊学園 長期経営計画

https://osaka-seikei.jp/disclosure/pdf/03_13.pdf

10 のアクションプラン

1. 大阪成蹊学園の教育目標の達成「人間力」教育の確立

- (1) 建学の精神「桃李不言下自成蹊」及び行動指針「忠恕」を体現する「人間力」のある人材を育成するための全学的な教学ガバナンスの強化
- (2) 学園各校及び各学部等のディプロマ・ポリシーに掲げる人材を育成する教育体系の充実

2. 明るく、品格があり、活力のある学園風土の醸成

- (1) 学生一人ひとりの品格を磨く「PBM(Personal Brand Management)プロジェクト」の展開
- (2) 教職員一人ひとりが高い「志」と「使命感」を持ち、教育研究活動・学園運営に参画する組織文化の形成(FD・SD)

3. 選ばれる学校であり続けるための成長戦略・将来構想の実現

- (1) 大学、短期大学、高等学校の多様な学生・生徒が学び合うキャンパスへの再編
- (2) 新学部・学科等の開設、既設学部・学科等の発展的改組による学びの充実

4. 少子化・進学トレンドに対応した戦略的學生募集・入試制度の改革

- (1) 志願者数を増やし、入学者を安定的に確保する募集広報活動の展開
- (2) 高校生の学修ニーズに応える多様な高大連携事業の展開
- (3) 多面的・総合的評価を実現する入試方法の改革
- (4) 学園及び学園各校のブランド力を高める戦略的広報の展開

5. 持続的発展を続けるための経営力の強化・財務基盤の整備

- (1) 学園各校の持続的発展を支える安定的な財務基盤の確立
- (2) 財政力と成長力のバランスある発展
- (3) ガバナンス・コードに基づいた適正な学園運営
- (4) 理事会、評議員会等の適正な運営による経営機能の強化
- (5) 各ステークホルダーに対する経営・教学情報の適切な公開
- (6) 遊休資産の売却、活用

6. 教育の質を保証し、特色ある教育を展開する全学的な教学改革の推進

- (1) 大阪成蹊学園教学改革 FSD 会議及び各プロジェクトを中心とした全学的な教学マネジメント体制の確立
- (2) 「大阪成蹊 LCD(Literacy:知識、Competency:行動特性、Dignity:品格)教育プログラム」を核とする全学的な「人間力」教育の展開
- (3) エビデンス・教学 IR 情報に基づく検証・改善サイクルの徹底
- (4) 総長、学長のリーダーシップ及び、副学長・学部長等、本部長・部長等の中間職による組織運営の強化
- (5) 定期的な自己点検・評価活動の実施
- (6) 運営諮問会議や学生評価員等による多角的な点検・評価活動の充実

7. 学生・生徒一人ひとりの成長を後押しする教職協働型の学修支援・学生支援体制の構築

- (1) 個々の学修状況や学生生活状況等のきめ細かな把握と、教職協働による指導・支援の充実
- (2) 免許・資格取得等に向けたサポート体制の充実

(3) 教員・保育士等採用試験合格に向けたサポート体制の充実

8. 学生一人ひとりのめざすキャリアを実現する教職協働型の就職支援体制の構築

(1) 就職率、就職希望率を更に高める包括的な就活サポートプログラムの確立

(2) 個々の就職活動状況のきめ細かな把握と、教職協働による指導・支援の充実

(3) 学びの専門性を活かした業種・業態への就職の強化

(4) 学びとキャリアを接続し、成長・変化が見える化するインターンシップ制度の確立

9. 世界の多様な人々との関わりのなかでグローバル・マインドを育む国際交流プログラムの充実

(1) 正課内外の学修が連関する語学・グローバル教育プログラムの確立

(2) 留学制度の更なる充実と留学者の派遣・受入の強化

(3) グローバル・アクティブラーニングプログラムの充実

(4) 協定校の拡大と国際交流プログラムの充実

10. 地域における「知」と「人」の拠点を形成する産官学連携・研究活動・地域貢献活動の活性化

(1) 企業や自治体等との連携による課題解決型の教育プログラムの充実

(2) 各教員、教育研究組織等における研究活動の活性化

(3) 公開講座の開講等による地域及び社会貢献事業の活性化